

「国語力」ってどんなイミ？

佐藤学習研究所 佐藤 久典

必ず指でなぞりながら、音読（おんどく；声を出して読むこと）をしましょう。

- (ア) 読み方があやしい漢字やコトバ
(イ) 意味がわからない漢字やコトバ
(ウ) 読めても書けない漢字やコトバ
- があれば、○で囲みましょう。
地名や場所も知らなければ、同じように○で囲みましょう。

<例文2>

平成5年発行の教科書（光村図書出版）の6学年用104ページに、下の文章があります。

（原文縦書き）

受験用の国語のテキストよりやさしいので、4年生や5年生の人も読んでください。

- * 黙読（もくどく；声をださないで読むこと）はいけません。読めない漢字が、なんとなく読めた気になってしまうからです。「読めた気」と、「わかった気」が一番危険（きけん）です。

読めない漢字（コトバ）は、「この字（コトバ）は読めないなあ」と、君自身がはっきりと知ることが大切です。

この例文のように、歴史に関係した文章を読むときは、学校の歴史の授業やテレビ番組の内容を思い出しながら読むと、楽しく学習することができます。地図帳も用意するといいですね。

一九八八年八月末、わたしたちは、奈良市にある平城京内のやしきあとの発掘調査を行っていた。

わたしは、一枚の木片のどろを洗い落とす作業をしていた。どろがすっかり落ちたとき、その木片の上に書かれた「長屋親王宮鮑大贄十編（ながやしんのうのみや あわび おおにえ じっぺん）」という文字が、わたしの目に飛びこんできた。木片を持つ手がふるえ、わたしは思わず大きな声を出した。その声におどろいて、かけ寄ってきたもう一人の調査員も、それを見て、さげんだ。「これで決まった。」

わたしたちが行っている史跡調査のための発掘は、現在の地面から少しずつほり下げていって、昔の建物や井戸、みぞなどのあとを探していく。すると、そのあとから、屋根に使われたかわらや、食事に使った土器などが出てくる。ときおり、こまや竹とんぼなどの遊び道具が出てくることもある。このようなものを探して、昔の人々の生活を調べるのも、発掘の重要な仕事のひとつだ。

みぞあとなどから出てくる物は、たいてい、昔の人が捨てたごみなのだが、当時の暮らしを知りたいと思っているわたしたちには、宝石のようなものだ。そんな宝石のなかでも、いちばん貴重なのは、木の札に文字を書いた木簡である。

木簡は、今でいえばメモ用紙に当たる。昔は、紙が少なく貴重だったので、文字を書く材料として、木を使うことが多かった。木は、どこでも手に入る。また、一度文字を書いても、その部分をけずり取れば、また使える。そこで、ふだんの生活で書く短い手紙やメモは、この木簡を使い、役所などで大事なことを書くときだけは紙を使うようにしたのである。

だから、もし発掘調査で木簡が見つければ、人々の日常生活を直接知ることができるので、貴重な資料となる。木簡は、今回の平城京の調査の前までに、全国各地で五万点くらい発見されていた。

今回の発掘は、開始から約二年がたっていた。これまでに、たくさんの建物やみぞのあとが発見されていて、重要な場所だという予感があった。ただ、そのやしきの主については、はっきりした手がかりがなかった。

ふつう、発掘調査で、やしきの主が分かるということはほとんどない。またいつものように所有者が特定できずに終わるのかと考えながら、建物の東はしにあるみぞをほっていた。

すると、そこには、四万点もの木簡が捨てられていたのである。一つでも宝石のように貴重な木簡である。それが、こんなに大量に、しかも、いちどに発見されたのだから、わたしたちのおどろきと興奮は、言い表しようのないほどだった。「今度こそ、やしきの主が特定できるかもしれない。」と、調査員たちは、胸の高鳴りをおさえるのに苦労した。そうしたときに見つかったのが、あの木簡だったのである。

あの木簡は、荷物を送るときに付けられた札である。「長屋親王宮」というのは、荷物が送られてきたやしきの名前だ。その下の「鮑大贄十編」は、アワビを十束運んできたことを示している。これがみぞに捨てられていたということは、この場所が、ほかならぬ長屋王のやしきだったということになる。

発見は、これだけではなかった。発見された木簡を調べていくにつれて、貴族の暮らしが次々と明らかになってきたのである。

長屋王は、今から千三百年近く前の奈良時代の人である。天武天皇の孫に当たり、大臣にまでなった有力な政治家であると同時に、すぐれた文化人でもあった。ところが、勢力争いに巻きこまれ、四十六歳のとき、自殺に追いつめられ、悲劇的な最期をとげたことは分かっていた。だが、このような公的な活動は知られているが、千三百年も前のことなので、私的な生活についてはほとんど分かっていない。四万点の木簡は、そんな長屋王の私的な生活を知る格好の材料となったのである。

では、木簡からうかがい知ることのできた生活とは、どんなものであろうか。

長屋王のやしきの中には、たくさんの建物がある。そこには、王の家族のほかにも、服や食器などを作る職人たち、さらには、画家や僧侶など、王に仕えていた多くの人たちも住んでいた。また、いっしょに暮らしていたのは、人間だけではない。犬や馬も飼っていた。おどろくべきことには、ツルまで飼って鑑賞していたのだ。

飲食物では、すでに、牛乳を飲んでいる。「蘇(そ)」という、牛乳を加工したチーズのようなものも食べている。

それだけではない。かれらは、「氷室(ひむろ)」という天然の冷蔵庫まで作っていたのである。この冷蔵庫は、奈良の山中にある。冬の間、池などにできた氷にさらに水をかけ、厚くする。切り出した氷と、カヤという草とを交互に重ね合わせて、何十段にもして保存する。夏になると、それを山から運んで冷房のために使ったり、飲用に使ったりしたのである。当時の庶民の生活とは比べものにならないほど、ぜいたくな暮らしぶりである。

発掘というのは、ただ土をほり返す地味な仕事だが、ごみとして捨てられた木簡から、魔法のように昔の生活がよみがえってくることもある。その魔法にみせられて、わたしたちは、今日も歴史と「対話」するために土をほり返している。

さて、下の(ア)～(ウ)とは、どれくらいあったでしょうか。次のページで整理してみましょう。

- (ア) 読み方があやしい漢字とコトバ、
- (イ) 意味がわからない漢字とコトバ、
- (ウ) 読めても書けない漢字とコトバ、
知らない地名や場所

(ア) 読み方があやしい漢字	…………… (合計	個)
読み方があやしいコトバ	…………… (合計	個)
(イ) 意味がわからない漢字	…………… (合計	個)
意味がわからないコトバ	…………… (合計	個)
(ウ) 読めても書けない漢字	…………… (合計	個)
読めても書けなコトバ、	…………… (合計	個)
知らない地名	…………… (合計	個)
知らない場所	…………… (合計	個)

たぶん、多くのおなさんは、これまでコトバを「何となく」使ってきたのではないでしょう。「コトバの正確な意味を知り、意味を知ったうえで、選んで使う」ということをしてこなかったと思います。ですから、「書きコトバを正確に使えるようにする」という、これからの仕事は、思いのほか大変な作業になるかもしれません。

けれども、難しいコトバが少ない小学生のうちに、一つ一つコトバを正確に知る具体的な練習をしておけば、中学や高校に入ったあと、書きコトバがずいぶんと楽になります。

このような意味からも、“今から”『書きコトバを得意にする a b c』の練習をする必要があるのです。

一日に15分でいいですから、『書きコトバを得意にする a b c』の練習を積み重ねていってください。

そうすれば、少しずつ本当の読解力が身についていき、1年後には、先生たちから「教科書でいどのコトバが正確にわかっていない」「教える内容がまともに伝わっていかない」「設問の意味がわかっていない」「よく読んでいない」などといわれなくなります。

また、授業中、「先生が何を教えたいか」や、「テストの設問の意図(いと)」がよくわかるようになり、学ぶことそのものが楽しくなっていきます。